



Title	解離発症に及ぼす心的イメージの影響 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	本間, 美紀
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第11508号
Issue Date	2014-09-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/57269
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Miki_Honma_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（文学） 氏名 本間 美紀

審査委員 主査 特任教授 菱谷 晋介
副査 教授 仲真 紀子
副査 教授 平澤 和司

学位論文題名 解離発症に及ぼす心的イメージの影響

精神医療の現場では、解離性同一性障害という典型的な解離の病理を持つ患者の多くが、現実と見紛うほどの知覚的詳細さを伴ったリアルなイメージを体験するという報告が行われている。解離理論の中には、そうした観察をもとに、リアルなイメージを体験する個人の傾向が、解離の発症に関与していることを示唆するものがある。しかし、解離とイメージとの関連について詳細な議論が行われることはほとんどなく、その上、両者の関係を調べた研究においても、一貫した結果が得られていない。

本論文では、解離とイメージの関連を明らかにするため、以下の2つの問題について検討が行われている。第1は、ある場面のイメージを形成した際、それをリアルに体験することと、解離傾向の高さが関連しているか否かという問題であり、第2は、イメージ体験が精神医療の対象となるような病的解離と関連しているかという問題である。第2の問題は治療的介入の一環として検討し得る。しかし、第1の問題は解離の基礎過程の研究であるため治療とは直接の関係がなく、アナログ研究を行わざるを得ない。そこでまず、解離症状の訴えを有する精神科外来通院中の患者（臨床群）と、非臨床群の解離体験構造、具体的には解離性体験尺度の構造の同型性が確かめられた。この結果を受けて、臨床群と非臨床群の解離体験に質的差異はないと仮定され、第1の問題の検討が行われている。

第1の問題は、類知覚的側面や情動的側面等、リアリティ発現に関わるイメージの複数の側面を区別した上で、詳細な検討が行われている。まず、類知覚的側面におけるリアリティを測定する質問紙が新たに構成され、解離傾向との関連について定量的検討が行われている。次いで、量的計測が困難な、情動などのイメージのその他の側面と解離傾向との関連について、テキストマイニングの手法を用いた定性的検討が行われている。第2の問題は、解離性体験尺度の下位因子のうち、リアルなイメージ体験と密接な関係にある「没入」因子が、しばしば非病的な解離と見なされることを受けて設定された。解離性体験尺度による病的解離の検出力が、「没入」以外の因子に由来するものであれば、リアルなイメージ体験と病的解離との関連を否定する根拠となりうる。ただし、「没入は非病的」という通説は、十分なデータに基づいたものではない。そこで、ミネソタ多面人格目録によって測られる、解離性障害に特徴的な精神症状との関連を検討することで、病的解離の検出に寄与する解離性体験尺度の下位因子の同定を試みている。

本研究の第1の成果は、従来、明確な結論が得られていなかった解離性体験尺度の因子構造を明らかにし、かつ、その構造が臨床群と非臨床群でほぼ一致していることを確認したことである。これらの結果は、解離の詳細な測定とアナログ研究が可能であることを実証しており、解離研究全体への大きな寄与と言えよう。

第2の成果は、イメージのリアリティと解離傾向との間に、有意な関連が見いだされたことである。これは、従来の研究ではみられなかった新たな発見である。また、こうした結果を得る過程では、臨床心理学的研究においては用いられることが希な実験心理学的な方法論が用いられており、そうした手法の有用性を示したという点でも、本研究は当該研究領域の発展に寄与するものと考えられる。

第3の成果は、解離性体験尺度の3つの下位因子の中で、解離に特徴的な精神病理との関係が最も強いのは「没入」因子であると示したことである。これは、「没入は非病的な解離である」という通説とは逆の結果であり、解離の発症要因の解明に、イメージの個人差という新たな枠組みを加えることの必要性を示した重要な結果といえる。

以上述べてきた本論文の諸成果は、いずれも、当該研究領域において大きな学問的貢献をなすものであると考えられる。そのことは、本論文に記されている研究成果の一部が、複数の査読付き学術雑誌に掲載されていることから確認できる。また、解離性障害という精神疾患に、イメージという基礎的な認知機能が関与していることを示した点は、病理と正常の連続性を示唆する知見として特に重要であり、より深い人間理解を目指そうとする解離以外の研究の発展にも、大きく寄与するものと期待される。ただ、本研究で示されたイメージのリアリティと解離傾向との関連がそれほど大きくなかったことや、臨床群と非臨床群の属性が必ずしも同じではなかった点に関しては、今後、さらに検討を加えていく必要がある。しかし、これらのことは本論文の意義を損なうものではなく、むしろ、当該領域の実証研究をさらに進展させるための、新しい出発点と位置づけることができる。

本審査委員会は以上の審査結果に基づき、全員一致で、本間美紀氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。